

広木先生に学ぶ パート3

不登校の子どもへの支援について

..「治す」は親中心 「ケア」の心は子ども中心

不登校のおが子と出会った時に親がまず思うのは、学校に戻れるように何か子どもにしてあげたいということです。最初の相談で親たちが質問するのは「学校に戻すにはどうしたらいいですか」です。親から働きかけて学校へ戻す方法です。その発想の前提にあるのは、問題は子どもにあり、それを「治す」ことが課題の中心で、どうしても助言や対応の方法を求め、それを駆使して子どもを変えようとする発想が中心にあるのですと...

しかしケアは逆です。ケアでは最も葛藤して悩み、苦しんでいる子ども本人の意思を中心とした対応だからです。指導や治療という対応とは、本質的に違った対応になります。

この子は、今、何に悩んでいるのか、何が辛いのか、そして何をしたいのか、して欲しくないのか、それを知ることなしに本人に働きかけることは、大変危険なことと考えています。

それだけケアの対応は難しいことなのですと... 続けて話しています。そして常に支えられているものの意思の理解が中心ですと... 不登校の場合ならば、学校に行きたいのに行けない辛い子どもの身になって本人が何を求めているのか、何が辛くて、何が嫌なのかなどを聞き取り、それに応えるように話しかけることです。そうやって信頼関係を築きながら本人との対話を重ねていくことですが、聴いてもらえた、分かってもらえたと感じたときに、子どもの顔に信頼の笑顔が戻ってくるのですと... (なるほどと思いました。親だけでなく学校も教育委員会も「治す」が中心の思考です。でも、子どもにとっては「ケア」が大切なのです。自分でもどうしたらよいか分からないのに「こうしたら、あしたらと言われても困るばかりです。その気持ちに寄り添ってもらえたら安心して笑顔になるのかなと思いました。)

不登校の子どもを中心にケアの関係を作るとは、子どもの言葉に関心を持ってしっかりと聞き取っていくことです。しかし、これを学んで実践することは大変です。学んで分かったから今日やって見ようと思っても、それが続くのは数日位だと言います。子どもは敏感ですから親のその変化も体験すると「あ、お母さんおつと変わったな」と直ぐに分かるようです。そして子どもが動き出したとすれば、それがどんなに小さなことであっても重要な変化です。ゲームがしたいも大事です。「～したい」と言い始めたということは、主体として自己が立ち上がる時です。芽生え始めた自己ですから、それが少しずつ育てられて欲しいなあという気持ちで受け入れることが重要です。でも親にとってどうしても許せないという気持ちになるのがゲームです。不安と心配が先に立つからです。「ゲーム依存になるのが心配」という自分の心配が先にくるわけです。そうすると、子どもの「～したい」という気持ちが立ち上がり始めた時に、その事実よりも自分の心配のほうが先にきて「何時間目はダメよ。〇時まで

よ」と言いきまり作りを共にやろうとします。子どもの心よりも自分の不安と心配を減したいという気持ちに打ち勝てなくなるからです。子どもの心の傷を癒やし、育ち直しを支援する上で何より大事なのが、この葛藤を越えて、初めて出来るのが「ケア」なのですと・・・
《スナリと子どもの心をケアできる親になるのは本当に難しいのだと思います。何回も何回も行きつ戻りつを繰り返しながら、子どもの心のケアへとつながっていくのだと。そのためにも親の会での交流していくことの大切さを思っています。一人ではできないけど、いろいろな人の話を聞きながら、子どもの～したいという心を大切にしていけるのだ、自分の思いや願いではなく、子どもの心に寄添うケアを。》

＜「わが子」を一人の人間として尊重できますか＞

ありのままの子どもを理解し、そして受け入れ続けることが不可欠だと強調してきました。目前にいるのは「わが子」ですが考えて欲しいのは、それが「一人の人間」であるということです。ところがわが子を「一人の人間」ととらえることは難しいのです。「わが子」と思う気持ちには「自分の分身」という思いが込められています。苦しまわが子を見ながら行儀するのは、そのためが多いようです。「わが子」を思う親の心にはどうしても「自分の気持ちを分かってよ」「どうして分かってくれないの」と自分の思いが先に立ってしまいます。そして子どもは辛くても、苦しくても、親や教師を驚かせたり怒らせたりしないように考えて、自分の気持ちを語らない、語れない子も多いのです。そして、自分が口にした言葉が受け止められ、理解される体験をしたとき、はじめて子どもの不安や苦しみも癒やされ、和らぐのです。「わが子」を苦しみを抱えた「一人の人間」と捉え、同時に、その不安や苦しみを理解しようと、その子の言葉にしっかりと耳を傾け、受けとめる姿勢を貫くことが重要なことだと考えています・・・子どもが「ゲームを買って」と要求を自分から言い出したとき「エッゲーム」と思うのではなく、その中身よりも話しかけてくれた行動と要求を出すという働きかけができた事実が重要なのです。子どもが自分の考えにこだわり続ける親に反感を感じていたら、子どもは、何か言いたいと思っても言わずに暴言や暴力などの行動で表現することが多いのです。「どうせ、何を言っても無駄だ」と思うからです。そう思ってしまうのは、その子どもが「話しかけてくれた」ということが大事なのです。それは「今のお母さんなら話したことをちゃんと聞いてくれるかも知れないと感じたときです。子どもから話しかけられた時は親が受け入れられた時でもあるのです。何回も親が「子どもを受けとめる」「受け入れる」と言ってきましたが、もっと大切なことは親が「子どもから受け入れられた」と感じられることです。「よくお母さんに話してくれたね」「分かった。話してくれてありがとう」という気持ちが大切なのです・・・

《親はどうしたらと不安で自分の思いを伝えよう分かってよと子どもに働きかけようとするのです。が子どもは自分の辛さを分かってくれないと行き違ってしまうのだと思いました。自分のことを思っていると感じたとき、子どもはじめて話を聞くのだと思いました。》